

レポートは権利？初耳⇒「権利は行使しないとソン」⇒このレポートを書いている自分

篠原正泰（富士フィルムグループ健保・常務理事）

「レポート」という言葉を聞いて「あ、自分は大学院の授業を受けているんだ」とその時、初めて自覚した。おまけに「レポートは権利です！」ときた。

「う～ん、権利か」。これまでレポートは、「書かなければならぬモノであり、イヤイヤやるモノでもあって、ウンウン呻吟するモノ」であった。

それが『権利』ときた。初耳だ。

「権利は行使しないとソン」と教えられてきた自分は、まんまとその巧みな手にハマリ、早速、このレポートを書いている。

私は一介の保険者であってジャーナリストではないし、レポートを通じて達意の文章が書けるようになろうなんて野心は持ち合わせていないけれど、レポートの「ごりやく」にあった小林秀夫の「書かなければ、何もわからぬから書くのである」はひどく心を打った言葉だった。

頭の中の「わかった」と渦巻いていることが、文章に落としてみると、降べきの順が逆であったり、粒度の大小が同じ顔をして並んでいたりといったことは良くあることで、それは書き落としてみないと分からないことはよく経験していることである。秀雄ですらそうなのだ、パンピー（一般ピープル）は“いわんやをや”なのだといたく感銘したところであった。

さて、「前例を超える」の授業に今、自分は出ている。自分は、とある伝手で東大の HPAC5 に参加し一生懸命活動をしたが、「保険者は珍しいね」と言われ続けた。（ちなみにその発表では大熊先生から教えを受けたことも記憶に新しい）そして、この授業でも「どうも自分は珍しそうだ」と感じた。多くのリピーターの生徒は熱心で講師とは懇意であり、相互に丁々発止の遣り取りがあり、その中で授業は進んでいく。自分は若干の“お客さん感”を持ちながら授業を初めて聞いた。

乃木坂スクールはこれまで島崎先生のお堅い医療保険の授業を聞いたこともあり初めてではないのだが、仕事関連でもあり居心地は良かった。それが今は「医療ジャーナリズム」の授業にいて、自分というお客さんはなぜ授業料を払ってまでココにいるのか？と振返っていた。

自分なりの解は「現場感」と「変革感」ということではなかったかと思う。保険者の仕事は Payer としては重要であるが、どうしても医療現場とは遠い。むしろジャーナリズムとも遠い。現場感がない。医療・介護・福祉は現場であり、その中心には患者がいてそれを取り巻く医療・介護提供側がいてサポーターがいて、そしてそして、で保険者といったところか。

また「改革感」だったか。「変える」ことは保険者でもしようとしている、がステークホルダーが多すぎてまるで動かない。後期高齢者2割負担？今頃？という感じだ。その成功体験には自分自身はなほだ薄い。しかし愚痴と悪口を赤坂見附の街角で叫んでも空しいだけである。

そんなこんなで期待感があって今回の受講を決めた気がする。強い動機がないことについては他の受講者に申し訳ないと思うけれど、今後も続く一連の話にはこっそり期待している。

クローさんの世直し7原則、盲目のリンクピスト大臣、ノーマライゼーション・・・「知らない現場」の第一幕が開いた」と感じながらの、あっという間の1時間半だった。